Japanese Association for Religious Studies

検証／顕彰される来歴
――墓地の近代をめぐって――

土居　浩

本報告は、報告者が研究を続けている東京名墓顕彰会およびその機関誌『掃苔』につき、〈墓地の近代性〉の視座から考察を加えるものである。拙稿「『掃苔』同人とその時代」（『SOGI』一〇四・一〇五・一〇七・一〇八、二〇〇八）で強調した〈墓地の近代性〉は、『掃苔』同人が対峙した同時代思潮としての、都市計画の思考であった。その時代、直接的には関東大震災からの復興、間接的にはそれ以前からの都市域拡張に伴い、墓地の移転が喫緊の課題となっていた。『掃苔』誌上でも当局関係者により、墓地の統廃合や移転の必要性が訴えられ、その論拠として具体的数値が示され、時には将来設計図も掲げられている。このように都市計画の一部として設計される公園墓地（霊園）構想は、具体的には多磨霊園に代表され、時代的な意味で近代に発生したこと以上に、工学的思考に基いた〈墓地の近代性〉を象徴する営為である。しかしそのことは、基本的に反・都市計画の立場であった『掃苔』同人が、近代性からきわめて遠くに位置することを意味しない。私見では都市計画と別の文脈において、きわめて近代性を体現する集団として『掃苔』同人を位置づけることが可能である。たしかに江戸時代から、自身の先祖ではない、いうなれば赤の他人の墓を巡る癖者たちは、随筆類に散見される（『耳袋』など）。その末裔として『掃苔』同人も自覚してはいるが、定期刊行雑誌によるネットワークが成立していることと、そこで交換される情報が墓の顕彰活動であり、その基礎となる墓の来歴を検証する作業であることとは、江戸時代の癖者たちとは異なる次元の地平に『掃苔』同人が立っていることを意味する。ここで見逃せないのは、『掃苔』同人の中核的人物たちが、史蹟名勝天然紀念物保存協会にも深く関与していた事実である。たとえば『掃苔』同人の初代会長・三上参次（一八六五―一九三九）、同じく副会長・白井光太郎（一八六三―一九三二）などはもちろんのこと、この両名に代表される世代より下の、実質的に会を運営していた人物たちこそ注目すべきである。その人物たちは、さらに二つに区分することができる。ひとつは、会の実質的パトロンであり、専門の放射線医学だけでなく医史学でも知られる藤浪剛一（一八八〇―一九四二）や、東京市公園課長として緑化行政はもちろん墓地行政にも先駆的業績を重ねた井下清（一八八四―一九七三）などに代表される理解者・庇護者的立場である。もうひとつは、東京市嘱託として史蹟の調査保存を推進しつつ文部省（当初は内務省）嘱託として『史蹟名勝天然紀念物』の編輯兼発行人を勤めた矢吹活禅（一八八八―一九六七）や、東京府嘱託として史蹟調査主任であった稲村坦元（一八九三―一九八八）などに代表される専門従事者的立場である。中でも井下・矢吹・稲村はその肩書きが示すように「官」の立場であるが、「民」の組織にも積極的に関与し、官民を繋ぐ役割を担った。特に井下・矢吹においては、『掃苔』同人と同様に、

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

鳥居龍蔵（一八七〇―一九五三）を代表とする武蔵野会にも積極的関与をしており、同会が関東大震災後の一九二四年二月に帝都復興院総裁（内務大臣）へ「帝都復興に際し史蹟名勝天然紀念物保存に関する建議書」を提出したことなどは、官民一体となった「公」的保存への試みとみなすことができよう。その不可欠な要素として「名家墓所」は位置づけられ、そこへ眠る「公」的重要人物の顕彰のために、墓所の来歴について検証が要請されることにこそ、都市計画とは別の〈墓地の近代性〉をうかがうことができる。

韓国・円仏教の死者儀礼
――全羅南道珍島の事例から――

川上新二

発表者は最近、韓国宗教民俗研究会編『韓国の宗教と祖先祭祀』（二〇〇八年、岩田書院）の書評を書く機会があり（『宗教研究』三六〇号）、その際、韓国の祖先崇拝に関して儒教祭祀を中心に研究が行われてきた従来の傾向を考えるとき、仏教、キリスト教、新興宗教と祖先崇拝との関係を考察していることが何よりも同書の業績であると評した。ところで同書では新興宗教としては天道教だけが対象とされていたが、発表者は以前、仏教系の新興宗教である円仏教の死者儀礼について、珍島での事例を通じて報告したことがある（「韓国における仏教と死者儀礼の近年の動き」朝倉敏夫他編『グローバル化と韓国社会』国立民族学博物館調査報告六九）。本発表では韓国の諸宗教と祖先（死者）崇拝の関係を考察する一助になるのではないかとの考えから、改めて円仏教の死者儀礼を検討する。

円仏教の死者儀礼は薦度斎と呼ばれるが、発表者は右の拙稿で、円仏教の薦度斎は生者に影響を与えているとされる死者に対して行われ、その死者は儀礼の依頼者と如何なる関係にある死者かという点でも、如何なる死に方をした死者かという点でも巫俗儀礼で扱われる死者の様相と一致するため、依頼者は円仏教の薦度斎を巫俗儀礼と並立する、生者に影響を及ぼす死者に対処するための選択肢の一つとみている可能性があると指摘した。しかし円仏教の薦度斎には巫俗儀礼と異なる面も指摘できる。以下この点を検討してみたい。

先ず指摘できることは、死者に対する姿勢の違いである。巫俗儀礼では死者は巫女に憑依し巫女の口を通じて自分の恨みや悔しさを生者に伝え、生者は死者に要望を伝えたり死者の話す内容に対抗したりもする。巫俗儀礼では死者と生者は対等な関係にあるということができる。一方円仏教の薦度斎では、死者の恨みや悔しさを生者が聞いてそれに共鳴したり死者を慰撫したりする場面はない。死者それぞれの思いは執着とみなされ、読経祝願などを通じて死者に執着心を捨てさせ、善道修行の縁によって冥福を増進させるというのが円仏教の薦度斎の内容であるため、そこでは死者よりも生者が優位に立つとみることができる。なお巫俗儀礼と相互補完的な機能をもつとされる儒教祭祀では、生者は死者をひたすら敬う立場にあり、生者から敬

NII-Electronic Library Service